



Title	ベ・エリ・ラヴロフ「歴史書簡」(翻訳) 3
Author(s)	松井, 茂雄
Citation	スラヴ研究, 3, 125-132
Issue Date	1959
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/4942">http://hdl.handle.net/2115/4942</a>
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113135.pdf



[Instructions for use](#)

## 歴史書簡 -3-

ペ・ユリ・ラヴロフ

松井茂雄訳

### 書簡其の九

社会的党派の旗印

私は、これまでの書簡の中で、次のようなことがら——一切の社会的進歩が、不可避的に個人の活動にかかっていること・彼等だけが文明を強固にし、それを停滞から救い得ること・彼等が周囲の社会的諸形態に批判的態度をとる権利と可能性を有していること・古いものに対する新しいものための、老衰するものに対する成長するものための闘争過程が、種々の理念の旗印を掲げた諸党派の合流とこれらの理念の名における諸党派の衝突を、不可避的にもたらすこと——について私の見解を述べた。

しかし、諸党派が衝突する際に、誰が過去のため・老衰するもののために戦っているか、誰が生命あるもの成長するもの側に立っているかを、いかにして識別すべきであろうか？——この問は奇妙に思われるかもしれない、というのも、諸君に説かれているのが、2年前・3年前・4年前に、2百年前・2千年前に流行した諸理念か、それとも、嘲笑・驚愕・嫌悪の情を以て関係を断ち前の時代に戻った方が良いような最新出来たの諸理念かは、実際面では非常にたやすく識別できるであろうから。最新の智的流行・有力な雑誌の最新の論説・人気のある批評家の最新の言葉——これが、生命あるもの・成長するものである。好むと好まざるにかかわらず、信奉者の数が減少した党派——これが、反動的党派である。これは最も安易な方法であり、人間的羊群とも言うべき人々はすべて、非常に愚鈍な一貫性を以てこの方法に準拠しているし、信念のない饒舌家達も、きわめて驚くべき融通性を以てこれに準拠している。何らかの党派に属する人間が、社会的饗宴において成功と利益を収める蓋然性——これこそ、彼等が前進的志向・時勢追随と称しているものである。もし彼等が正しいとすれば、進歩という言葉はまったく無意味であろうし、歴史は気象表に類するものとなるであろう。我々は、気象表によって、雨天の日と晴天の日・風が南西から又は北東から吹く日を指示し得るが、統計数字の表にないことがらは、すこぶる決定困難である。とするならば、私が今書いている書簡も、私の見る所では、書かれる理由を持たないであろう。社会的気象学は、物理的気象学と同じように、ほとんど私の興味をひかないからである。雨天と旱天が単純な連続性を示しているのは、特殊な場合と特殊な地方だけである。我々は変り易い気候地帯に生活している。昨日と一昨日の風の方向にもとづいて、明日の風の方向を予言することは、我々にはかなり困難である。我々は天候の変化のために苦勞しているが、その変化はわからない。その気があり且つそれが出来るなら、オーバーシューズと傘・暖かい衣服とぴったり閉まる窓のついた家を準備し給え。しかし、諸君は、先週の木曜に降った雨と今日の雨との連関性を、まさか研究しはしないであろう。このようなことは、我々の知識の現段階においては、政治的気象学における場合と同様に、物理的気象学においても、努力の報いられない仕事であろう。科学は、最大の危険に脅か

されている人々のために測候所を設置し、接近しつつある颱風を襲来の数時間前に知らせる以上には、進歩していない。

残念ながら、私は、進歩主義者と反動主義者を識別するための上述の如き安易な方法を、認容することはできない。私は、第三の書簡の冒頭で進歩の諸要求を提示したので、首尾一貫するためには、これらの要求が諸党派間の区別をも決定することを、認める義務がある。敗北した党派が、進歩の党派である場合がある。10年前・50年前・100年前に書かれたほとんど読まれない本が、最新の雑誌論文より、より生命ある歴史的諸原理を内包している場合がある。昨日の流行が、今日の流行よりも、未来のより良い本能によって生気を与えられる場合がある。そうだ、考えても見給え、私は、1861年の諸雑誌の方が1869年や更には1890年のそれらより良いと思っている。私は、シェーリングよりカントを、クザンよりヴォルテールを良いと思っているし、カトコフよりもルキアノスの方に、遙かに多くの生き生きした進歩の諸要素があると考えている。もちろん、これは、最も流行的な傾向と常に同一水準にあると思っている或る進歩主義者達を、憤慨させるであろう。これは、「傾向遊び」を兒戯と心得ている永遠に落ち着きすました活動家達の軽蔑的微笑を誘うであろう。これは、恐らく、ドモストロイとビザンツ帝国の愚かな崇拜者達を喜ばせるであろう、何故なら、彼等は、この見地からすれば、彼等も真の進歩主義者であり得ると考えるであろうから。憤慨したり、微笑したり、喜んだりすることは、彼等に任せておこう。

進歩は個人の発達と社会的諸形態への真理と正義の具現化とに外ならないということは、認容すべしとしても、進歩的党派と反動的党派の諸特徴に関する上述の問題の解決は、遙かに困難である。諸党派の識別基準となる外部的諸特徴は、全く存在しないからである。ああ！正にその通りなのだ。人間の文明が有している言葉の中には、無条件に、何時いかなる所でも、進歩主義者の旗印にだけ掲げられ、或いは反動主義者の旗印にだけ掲げられるような言葉は、存在しない。最もすぐれた思索する人々に多くの場合最も生き生きした社会原理と思われた非常に偉大な諸理念も、歴史のある時期には、人類の発達を阻止した諸党派に人々を誘い込む囿の役割を演じた。非常に反動的な諸要素が、或る時代には、進歩の手段となった。

これを明らかにするために、個人生活と社会生活の一般的諸原理と名付け得る諸理念と、社会生活の個々の諸形態に対応する他の諸理念とを、別々に究明してみよう。これら二種類の諸理念は、さまざまな結びつきにおいて、党派が本質的には利己的＝打算的諸目的を追求する場合にも、又党派がその信奉者達、しかも彼等だけが絶対的真理と正義の代表者であると熱狂的に信じている場合にも、戦かう党派の旗印になるのが普通である。この二種類の諸理念は、発達の原動力にも、停滞の手段にもなり得る。事実、両者は、或る時には発達の原動力となり、或る時には停滞の手段であった。しかし、この現象を引き起す諸原因は、両者の場合それぞれ異っている。

一般的諸原理——発達・自由・理性等々——について言えば、それがこのような宿命を負わされてきたのは、その意味する所が広いために、多数者には非常に理解しがたいものであり、或る人々は何ら明確な概念規定なしにこれを繰り返す、他の人々はこの非常に卑しい反動的な諸目的の手段とすることができたからに他ならない。発達という言葉は、宿命論的な意味で不可避性と見なされる場合があった。この不可避性は、現実に存在する

事実と見なさなければならぬだけでなく、その一切の具体的なあらわれにおいて智的承認と精神的崇拜を要求する正当な原理である。歴史過程の呪物崇拜者達にとっては、社会的癌腫の病理学的細胞は、社会的筋肉と神経の健康な細胞と同じ程度に、人間発達の諸要素なのである。しかし、歴史が人間的意義を有していると考えている人々にとっては、そうではない。すなわち、病的なものと健康なものとは、先行過程の等しく必然的な当然の結果ではあるが、後者だけが発達を条件づけ、前者は崩壊と死滅の諸要素であることを、彼は知っている。病的なものの発達(もしここでこの語を使用しなければならぬとすれば)に対しては、現在及び将来にわたって、できるだけ抵抗しなければならない。健康なもの(本来は、これだけが歴史において発達という名に値する権利を持っている)に対しては、協力しなければならない。自由という言葉の無意味な使用は、少しでも歴史をよく考えた人なら誰でも知っていて、これについて語るべきことはまずないであろう。弱者を苦しめる強者の自由、餓死する貧乏人の自由、子供達の肉体的・智的・精神的能力を歪める両親の自由——これが、この原理の広く知られた公式である。理性の名において、事実の批判を拒否して絶対的なものの観照に沈潜し、社会的諸形態の批判を拒否して存在するものを理性的なものと認めることが行われた。正義は、たとえそれがドラコンの法律であろうとも、合法性と同一視された。真理は、愚かな反覆だけを要求する理解しがたい神秘的命題を意味せしめられた。徳行は、善人が悪人の犠牲になり、現実的幸福が幻想的幸福の犠牲になること、つまり、悪との闘争ではなくて、悪に対する無抵抗と考えられた。スパイ行為と残虐——イエズス会神学生の行った友人の密告、メディアン人・アマレク人・アンモン人全部の剿滅、異教徒に対する約束の不履行、異端審問の邪教徒火刑とパーソロミューの夜の虐殺——が義務の遂行と見なされた。生活の神聖は個人の発達の否定、現実的真理と人間的正義の否定、苦行者の愚かな自己修行、隠者の野獣的生活様式、聖者の理性喪失、あり得ないものに対する信仰、不信者に対する迫害と信者に対する赦しの中に見られた。要するに、人間の有する一切の最も悪い・最も動物的な・反社会的な・墮落的な・非人間的な面が、発達・自由・理性・徳行・義務・神聖の仮面によって、自己を擁護したのである。ただ批判だけが、強固な仮借なき批判だけが、個人の願望・本能・一切の天性とまったく相反する陣営へ、響高い言葉によって誘惑されることから、個人を守ることができた。一般的諸原理は、この場合きわめて平凡な看板であったし、まったく対立的な二つの相闘かう党派が、実にしばしば同一の偉大な原理の擁護者であると自ら宣言した。すべての宗派人が、自分を真の信仰者と称し、他宗派の人々を異教徒と呼んだ。あらゆる哲学者が、事物の真に合理的な理解は彼等の学説の中にしかない、と主張した。たしかに、カエサルもカトーも、共にローマの幸福を擁護した。奴隷所有者も奴隷制反対者も、共に正義を要求した。偉大な言葉が真の意義を有したのはどの党派であるかを、思索する人々は探求しなければならなかった。自由の要求は(フランスの僧侶階級におけるが如く)、ただ他の人々を抑圧する権利の要求ではなかったか? 正義への呼びかけは(農奴制支持者・資本家達におけるが如く)、ただ歴史の非道徳的事実を、その非道徳性が既に意識されていた場合にさえ、合法化しようとする願望ではなかったか?

一般的諸原理は、余りにも広汎な意義を有しているが故に、対立的諸党派の旗印となる可能性があるが、このような可能性は、個々の社会的諸形態には存在しないように思われ

るであろう。家族・法律・民族・国家・教会・学術上・経済上または芸術上の目的を有する諸団体は、理解にさして困難でない一定の目標を掲げており、従って、これらの諸形態の中どの形態が発展的・進歩的原理で、どの形態が死滅的・反動的原理であるかを、言うことは困難ではない。しかし、残念なことには、全然そうではない。しかも、その原因は、偉大な一般的諸原理を時々大げさな空言に変えてしまう原因とは、まったく異っている。一般的諸原理は、正にその一般性の故に、それらが適用される現実的内容を明瞭に意識する場合にだけ、一定の意義をとる。だが、個々の社会的諸形態は、正にその特殊性の故に、それ自体としては、進歩的でもなければ、反動的でもない。それらはすべて、個人の発達途上におけるすこぶる厄介なブレーキの役を勤め得ると同様、進歩的影響を諸個人に及ぼす可能性を包蔵している。それらの各々が有する歴史的価値は、何らかの形態が所与の時代に存在する際の諸条件のコンビネーションと、その時代のあらゆる社会的諸形態のコンビネーションによって決定される。社会的発達の諸条件は、一定の時代に、所与の形態を進歩の手段として最高の地位に押し上げる。そしてこの時代に、社会は、その他すべての社会的諸形態がこの唯一の指導的形態に従属するという条件の下でのみ、発展し得る。しかし、諸条件は変化する。すなわち、昨日支配的・基本的諸要求であったものが、今日はその他多くのものと同様に、個人と社会の諸要求中の単なる一つとなる。昨日従属的であった社会的結合の諸形態が今日は同等の権利を要求し、明日は支配権を要求する。従って社会は、依然として進歩的であろうと欲するならば、新しいコンビネーションに移行しなければならない。昨日支配的であって、その支配権のために昨日の進歩主義者達が闘う権利を持っていたが、今日はその最高の地位を譲らなければならない。そして、それを擁護する者は、反動主義者となるであろう...新しいコンビネーションも、それはそれで自己の時代を持ち、それが過ぎると更に新しいものと交替しなければならないであろう。社会的諸形態の一時的コンビネーションを呪物として崇拜する者は、必然的に反動の徒となる危険を冒す、何故なら、進歩の諸要求を最終的に満足させるようなコンビネーションは、一つとしてないから。思索する人間にとっては、社会的諸形態は脆い歴史的衣裳以上のものであってはならない。この衣裳は独自の意味をもたず、これらの諸形態が所与のコンビネーションにおいて、所与の時代の諸要求——諸個人の自由な発達・最も正義にかなった諸個人の関係・文明の福祉に対する個人の出来るだけ広汎な参加・これらの福祉の強化・停滞の危険の排除——にどれほど合致しているかに応じてだけ、その意義を獲得する。

種族結合と家族結合の基礎をおいた人間の血族関係は、一再ならずその進歩的意義を変えたようである。人間の先駆者である霊長類が生活した社会形態については、或いは、考古学者達が地殻の第三紀層にその形跡を観察する、というよりはむしろ、推察している原人の生活した社会的形態についてさえ、明確な観念を持つことは困難である。しかし、この動物的社会形態は、母を中心に形成された民族的結合——現代の社会発生学者達が、次第により大きな確実性を以て、最初の純粹に人間的な結合として、我々の想像に再現させている民族的結合(私はこれについて前に第四の書簡で語った)——に比較すれば、不可避免的に劣等な社会形態であった。この母系氏族は、ほとんど至る所で、家父長制氏族に、次いで後者によって作り出された家父長制家族にその地位を譲った。これら二形態間の争は、その進歩的意義の面では、もはや我々にはまったく不明である。ことによると、否、

多分、母系氏族に対する家父長制氏族と家父長制家族の勝利は、人間の諸集団がいくらかではあるがより保証され、生存競争が若干緩和され、従って、利己主義的欲望がそれぞれ個々の目的を達成しやすくなったことから起った、社会的原理に対する利己主義的原理の勝利であつたらう。しかし、より有利な状況に置かれ、且つより多くの余暇を有した小数者の個人的批判は、家父長と家柄の良いものを特殊な地位に置く家父長制的形態を通らなければ、生み出されなかつたかもしれない。家父長制が結合の基本的な発展原理をなして、人類の経済的・政治的・宗教的・部分的には科学的諸要求が、一族に対する家父長の絶対的優越の下、きわめて強固な位階制的世代関係の下で、最もよく解決され得た時代が、人類にとって実際に存在したのかもしれない。しかしながら、現在非常に解決の困難な問題——家父長制的生活様式が、母系制度の時代に較べて進歩であつたかという問題——はそのままにして、共同の事業が結合内部の血縁関係と別ちがたく結ばれていた原始的結合のあらゆる形態を、種族関係という術語によって統括しよう。そうすれば、妻子を共有した母系氏族も、セム族の慣習が現在まで維持し且つ古代世界の法律がより進んだ形式に仕上げた家父長制家族も、一妻多夫の習慣を有するさまざまな過渡的諸形態も、人類の中にどこかで維持されたその他のより特殊な諸形態も、ことごとくこの概念に含まれるであろう。これらすべての形態の中では、共同防衛のために人々を団結させて、彼等に強固な連繫を造らせた最初の結合としての氏族的結合が、基本的な進歩的原理であつた。習慣の暴圧・異種族に対する憎悪・家柄に関する詰らぬ誇り・先入観による死んだ祖先との交霊・諸種族間の不和反目は、その当時においても、もちろん、この原理の所産であり、且つ多くの苦悩をもたらした。しかしそれでも、相対的には、この形態は、社会の苦悩を可能な限り最小限に止め得たし、或いは、少くとも、将来におけるより広汎な思考活動の——従って又、真理と正義の途上におけるこの思考活動の影響による未来の諸世代における苦悩の減少の——唯一の可能性を生み出す原因となり得た。いずれにせよ、種族組織は、当時であつては、進歩であつたと言わなければならない。諸種族が種族的復讐のためにどれほど互に虐殺し合ったとしても、この虐殺で滅びた人間の数は、種族関係によって諸個人が十分に守られていなかった時よりも、少なかつたであろう。習慣が個々人にどれほど重くのしかかっていたとしても、従って又、族長がその種族成員の労働と生活をどれほど乱暴に搾取したとしても、種族の習慣又は族長の権力によって結合された種族の統一行動は、個々人がばらばらに行動していた時に種族成員に出来たであろうよりも、より多数の者を飢餓と危険から守ることをこの種族に可能にした。これらの集団に属する人々が、異種族を奴隷にし・撲滅し・苦しめながら、いかに非人間的な扱いをしたにしても、それでも人は、氏族的結合の内部では、彼自身と個人的に彼にとって大切な人々の生命・幸福・名誉だけではなく、觀念の上で彼と結びついている他の人々——彼と同等の権利・同等の義務をもっていることによって、つまり、彼等の幸福の中に彼の名誉があり、彼等の凌辱の中に彼に対する凌辱があることによって、觀念上彼と結びついている他の人々——の生命・幸福・名誉をも守らなければならない、という考えに慣れていた。——法律が個人を擁護しはじめるや否や、流血の氏族的復讐は有害な社会的偏見となり、進歩的要素から反動的要素に化した。自由な経済的連合が、氏族的・共同体的結合よりも、一層大きな保証と利益を個人に与えはじめるや否や、経済的な氏族的原理の擁護も、逆行的性質を帯びる

に至った。一切の人間の価値は彼自身の価値に連なり、且つ一切の人間の凌辱は彼に対する凌辱であるという思想が、人類の中に形成されるや否や、起源を一つにする人々の優先的つながりの思想は、文明の途上に横たわる障害と化した。

人類の生活における次の時代には、法律が支配的原理となり、且つ、正当な権利を以て、進歩的原理となった。法律は、強者の横暴から弱者の生活を保護した。法律は、契約を強固なものとして、自由で広汎な経済的発達の可能性を共同体に与えた。法律は、出生・財産等々のあらゆる偶然的事情を抜きにした人間の精神的同権・人間的価値に関する概念を、人々の心につちかうための最も強力な手段の一つであった。しかし、法律も、常に進歩的要素であったのではなく、又現にそうであるわけではない。私は、社会における法律の形式的要素の増大と相まって不可避的に深まってゆく停滞への傾向を、後の書簡で究明しようと思っているので、今の所は若干の指摘だけで満足することにしよう。法律は常に文字である。社会生活は、その絶え間ない有機的発達の中で、不可避的に、立法者が予知し得るよりも遙かに多くのさまざまな分野に拡大してゆき、立法者が——きわめて誠実な立法者すらが——その公式を書き記した際に存在した諸条件を急速に追越してゆく。生活の全体を是が非でも所定の法典形式に押し込もうと欲する者は、進歩的活動家になることが出来ない。新しい歴史的諸要求を目にしながら、存在意義を喪失した法律に味方する者は、反動主義者である。もちろん、少しでも整備されたほとんどすべての社会は、存在意義のない諸法律廃止の可能性を包蔵している。しかし、時には、政府ないしは有力な少数者の利己的関心が、社会意識の自然の趨勢全体に嫌悪されている法律の形式的存在を支持する。もし、1870年の怖るべき戦争が、第二ボナパルト帝制の基礎をことごとく覆かえさなかったとすれば、恐らく、この帝制は、合法的な形態としてなお永い間フランスに君臨したであろう。しかしながら、その本当の信奉者はきわめて少なかったので、9月4日には誰一人としてこれを擁護する者がなく、同時にこれに代った政府は、政治的・智的・精神的な面で少しも秀でてはいなかった。このような場合には、文字は依然として法典の中に存続し、時には利害関係のある熱心な擁護者をもちさえする。しかし、真理・生活・進歩は、文字と共にはない。その時には、検事＝告発者の要求が、法律の見地から見ていかに正当であろうとも、真理は、法律的な明白さに逆って無罪を宣言する陪審員の側にある。その時には、死刑執行人が犯罪者を車裂きの車輪にくくりつけて、或いは、警官が拷問道具を擁護して、いかに合法的に行動しようとも、進歩は、死刑執行人の手から受難者を奪取し、恥ずべき道具を破壊する非合法的な群衆の側にある。その時には、カイサル＝アウグストゥス・ドミティアヌスは神であって、彼の偶像には犠牲を捧げなければならないという元老院の法令が、いかに正しく法制化されていようとも、又、自分の帽子に敬礼せよというグスラーの要求が、いかに正しかろうとも、歴史は、ドミティアヌスは神でなく、彼の御像に犠牲を捧げてはならない、と語るぼろを纏った伝道者に恐らくは味方し、又、グスラーの帽子に敬礼しないで、彼に致命的な一矢を放った半ば伝説的な射手に恐らくは味方する。

後期のローマ皇帝達と初期の野蛮人の王達の時代に、教会は、社会的形態として、正当な権利によって支配的意義を獲得し、あらゆる社会的原理が教会に従属した。一方ではローマの国庫が、他方では野蛮人達の掠奪が、多数者から一切の生活手段を奪っていた時代に、古い法律も新しい社会的諸要求も、個人を守るだけの力を有していなかった時代に、

司教は、結合的な精神的権威の名において、進歩的な社会的活動家となった。彼の心遣いは、一面的であったが、やはり、苦しみあえぐ人々についての心遣いであった。彼の裁きは、正しくはなかったが、やはり、幾らかでも正義に近づくことであった。時には、彼は、何人も批判しなかった皇帝に対してすら、その粗暴な振舞を批難し得た。彼は、いかなるものも押し止め得なかった野蛮人達の猛々しい衝動を、地獄の責苦と神の僕の復讐という恐怖によって、稀にはあるが押し止めることが出来た。カツシウス派とベネディクト派の規約は、いかに野蛮であったとしても、やはり、知識——それも単に読み書きと初歩的教養——の伝統を維持する唯一の可能性を、所与の条件の下で与えた。従って、これは、この時代の西ヨーロッパにとっては、進歩の積極的要素であった。しかし、司教と僧院の社会的意義に関するこのような観念は、西欧では忽ちの中に反動的原理となった。最も乱暴な血族的裁判でさえ、民事に関する教会の裁判より公正なものになった。封建制度・中央集権的国家行政・成文法の一切の悪用も、社会的諸事件に対するローマ法王の干渉権悪用に較べれば、物の数ではなかった。位階制的要素としての教会の独立は、国家の前では、反動家達の理念となった。神学以外の研究諸部門に対する神学者達の支配は、最も有害な発達のブレーキとなった。教会政治の機構が進歩の協力者であったのは、それが社会の支配者とならず、他の指導的諸原理のための——民族性のため、高い種族の文化を低い種族の間におし拡めるためなどの——戦の参加者となった場合だけである。

もう一つ、第五の書簡でも指摘した例をあげよう。科学は、もちろん、その成果を獲得する過程においては進歩の要素である。しかし、社会的形態としての学術団体は、或る場合には大いに社会的発達のブレーキであり得る。現存する社会の一切の力が生活の諸問題に集中されなければならない時に、これらの問題に無関心な社会成員はことごとく社会の敵である時に。又、政論家達のおわただしい論争・政治集会の騒然たる討論・諸党派の流血の闘争を、尊大な軽蔑の目で眺める限り、誰一人として自己を進歩の活動家と見なす権利を有しない時に、大いに社会的発達のブレーキであり得る。このような時に、学術団体は、もし自らの人間的意義を理解しているならば、滴虫類の新種・フランク王クロヴィスの衣裳の裁ち方・ケルト語の動詞変化に関する研究を後廻しにして、その諸研究を社会ないしはその成員の諸要求に合致させ、自己の能力・自己の時間・自己の生命を、生活の諸問題に捧げるであろう。その時には、幾何学の新しい領域の創始者モンジュは、幾日も仕事場にこもり、干からびたパンをかじって、労働者のために教訓を書く。その時には、科学的な化学の創造に参加したベルトレやフルクロアは、硝石の採掘と農村出の兵士の教育に身を捧げる。その時には、比較言語学の創始者ウイルヘルム・フンボルトは、自己の全智力をプロシヤの復興に集中する。天文学者アラゴは、共和国の創立者会議に出席する。細胞病理学の創立者フィルヒョーは、議会でビスマルクを論難攻撃する。しかし、学術団体は、これと異なる行動もとる得る。それは、自己の書齋的研究のこの世のものならぬ平安を誇りながら、一般大衆の苦悩に対する無関心・官製的な《現状》に対する尊敬を、自己の周囲におし拡めるために、自己の勢力を利用することができ、或いは、少くとも、あわただしい現下の諸問題への参加を、自己の価値を傷つけるものと見なすことが出来る。この場合には、その研究の学術的価値がいかに高くとも、学術団体は、歴史の不可避的判決を免がれ得ない。科学——むしろ、誤って理解された科学——の名において、現実の諸問



題に対する無関心主義を説き、自らもこれらの問題への参加から遠去かる学術団体は、進歩の要素ではなくて、反動の要素となる。

差当りは、これらの例で満足することにしよう。これらすべてが証明しているのは次の一事——発達の原理は、上述の社会的諸形態のどれにも無条件には従属しなかったし、又従属しておらず、それらの各々は、所与の時代に所与の状況の下で、多少とも有力な進歩の手段になり得るということ——である。これら諸形態中の各々を、一切の状況に通用するものとして無条件に擁護する者は、絶対に反動的な原理を説くものである。何故なら、同一の形態が、又は諸形態の同一のコンビネーションさえが、人類の利益と一致しつつ、あらゆる状況を通じて優越することは出来ないから。諸形態は、歴史の正しい発展のために、順番に支配し、且つ次々に地位を譲ってゆかなければならない。

では、どこに進歩があるかを、歴史の所与の時点においていかに見分けるべきか？ 諸党派の中でどれが進歩の代表者であるか？ どの旗印にも、偉大な言葉が掲げられている。あらゆる党派が、一定の諸条件の下では進歩の原動力であったし又あるであろう所の諸原理を宣伝している。あれも良いし、これも悪くない。しかし、一体いかに選択すべきか？

理解せず・思索せず・他の権威に盲従する者は、選択に当って誤らざるを得ない。いかなる言葉も、進歩の特権を有しなかった。それはどの公式的な枠にもおさまらなかつた。言葉の背後にひそむその内容を探求せよ。所与の時代と所与の社会的諸形態の諸条件を研究せよ。自己の知識と信念を発達させよ。これなくしては不可能である。自己の理解・自己の信念・自己の決意のみが、個人を真の個人にする。この個人をよそにしては、偉大な諸原理は存在しない、進歩的諸形態は存在しない、進歩一般は存在しない。重要なのは、旗印ではない、重要なのは、旗印に掲げられた言葉ではない、重要なのは、旗印を担う者の思考である。

この思考をより容易に見分けるためには、思考過程——その助けをかりて、人々が偉大な言葉の背後に、時にきわめて醜悪なものを隠す所の過程——の実態を明らかにしなければならない。(未完)